⑥ 魚にささげた人生「野網和三郎」（のあみわさぶろう）

今から80年ほど前に，日本で初めてハマチのえづけに成功し，今の養殖漁業のもとを作ったのが，引田で生まれた野網和三郎です。和三郎は1908（明治4）年に網元の「まるさ」の三男として生まれました。

沿岸漁業の行き詰まりを感じた和三郎は，地域の人々の反対を押し切って安戸池で魚の養殖を試みました。養殖は，まず小魚のアジ・サバから始めました。しかし，養殖どころか，池に放してすぐに魚は全滅してしまうありさまでした。「海とは少し環境の違う安戸池で養殖は無理なのか。海には境界線でもあるのか。」と和三郎は悩みました。もともと，養殖などできるはずないと思っていた多くの漁師たちは，「金持ちの遊び事だ」と和三郎をあざけり笑いました。

しかし，和三郎はくじけることなく，今度は魚を放す区画を１０倍に広げてやってみました。魚もタイにしてみました。しかし，タイが育つには，安戸池の水深は浅すぎ，今度も失敗に終わりました。

そして，いよいよ３回目。今度はハマチの稚魚を池に入れてみることにしたのです。そしてエサも工夫してみました。イワシ・サバ・イカなどをすりつぶしたものを与えてみたのです。祈るような気持ちでハマチの子どもを育てようとした和三郎は，ハマチの池に飛び込んで自分で観察したり，池の酸素が足りなくなるのを防ぐために，水車のついた船を走らせるなど，人間と同じように，魚に愛情を持って接していきました。すると和三郎の願いが通じたのか，今度は，元気良くエサを食べ，順調に育っていきました。

その後，和三郎は，エサの与え方，水質の管理など研究を進め，今の養殖業の基礎を築きあげていき昭和の初めにハマチの養殖に成功しました。日本のハマチ養殖はここから始まったのです。

時代は変わり，水産業は和三郎が考えていた通り，「“獲る”漁業から“育てる”漁業へ」とその方向を変えていきました。育てる魚の種類もどんどん増えていきました。しかし，海の汚れ，赤潮など多くの問題も出てきました。今，環境に配慮した漁業への取り組みが進められています。和三郎の「海を愛する」という考えが改めて大切だということが分かってきたのです。

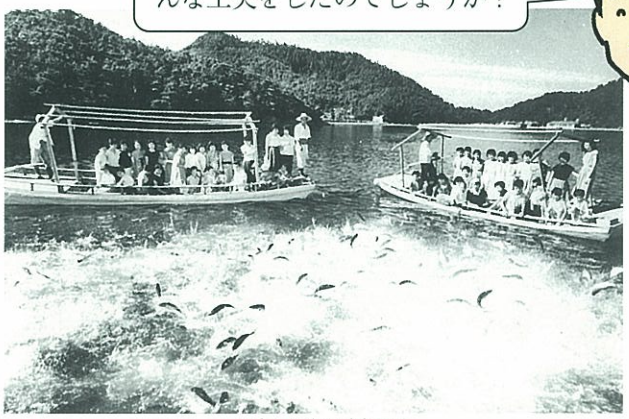
何回も失敗しながらも，成功するまで努力を続けていくことができたのは，なぜでしょうか？

＜安戸池のほとりに立つ和三郎＞

「和三郎の足跡」（そくせき）

西暦	できごと
1908	引田（現在の東かがわ市引田）に生まれる。
1926	三重県志摩水産学校４年を終了し，島根県立水産学校を卒業する。
1927	アジ・サバ・タイを安戸池に放流するが失敗。３度目のハマチで成功。
1928	ハマチ養殖の事業化に着手。
1952	安戸池養漁場は組合事業になる。
1961	日本かん水協会設立初代会長に就任する。瀬戸内海連合海区漁業調整委員他を歴任する。
1969	亡くなる。

養殖を成功させるために，どんな工夫をしたのでしょうか？



＜安戸池の様子＞

ハマチになった和三郎　―「タイ」の失敗―

大正から昭和へと時代は変わった。昭和2年，和三郎は21歳の春を迎えた。１回目のアジ・サバの失敗は，和三郎の心に強く焼きついていた。養殖漁業に一歩足を踏み入れたからには，もう後もどりはできない。「若いんだから失敗なんかに負けずガンガンやってやる。これからが本番だ。」どうせやるならと，区画策（注１）を今までの10倍に広げ，第2回目の放流魚を待つばかりにこぎつけた。

４月から５月にかけて，産卵のため太平洋からやってくるタイが，鳴門のうずしおにもまれ，瀬戸内海に入ってくるのを和三郎は待っていた。和三郎が目をつけたのは，子をはらんだ高価なサクラダイではなく，ちょうど産卵を終えたサケのように，見るもあわれにやせこけた帰りダイなのである。「あの帰りダイを区画策に入れ，たっぷりとエサをやればもとの姿になり，アジ・サバより高く売れるにちがいない。それにタイだったら，貧しい漁民や活気のなくなった引田町にも少しは刺激になるだろう。」和三郎の大胆な発想である。

タイを放流すると聞いた兄たちも，「ほう，タイでやるんか，そりゃおもしろいかもしれんぞ。沖枡網（注２）にかかったらすぐ持ってきてやる。」と意外にこころよく引き受けてくれた。タイは普通30メートルから50メートルの深い海に住んでいるため，深海の水圧から内蔵を守るために，浮き袋が大きくなっている。しかしこれから放流しようとする安戸池の深さは，10メートル足らずである。だからタイはそのまま池に放すとバランスを失い，背泳ぎのかっこうになってしまう。どうしたらよいか和三郎は頭をひねった。そしてそれには，先のとがった竹の針を肛門から差し入れ，浮き袋の空気を少し抜いてはどうかと考えた。

準備が整い，タイが毎日運ばれてくる。和三郎は，タイの空気抜きの説明をして，漁師たちと慎重に竹針をさしたが，タイには思いもよらぬ傷をおわせたことになった。海と安戸池の違い，それに何も知らぬしろうとの針さし…。彼はタイの無事を祈らずにはいられなかった。

一週間がたったが池は何の反応も示さない。どう考えてもこの二・三日が勝負と思われる。家に帰れば，タイの針さしについて考えるのだが，あれしか方法がないような気もする。もしその傷が致命傷になっているのであれば，もうとっくにタイは浮いているはずなのだが……。心配でたまらない和三郎は，ついに櫓（注３）に泊まってしまった。夜がふけても，和三郎は眠いどころか不安がつのるばかり。長い夜をやぐらで過ごした和三郎は，「バシャッ」夢の中で何かの音を聞いた。池に魚の気配を感じ，じっと水面に目をすえた。「タイだ。タイがはねた。確かにタイだ。」数百尾の見事な大ダイの行進。思わずおがみたくなった。和三郎の胸はキューンとなり，目的にやっと手がとどいたような気がした。「おい，えさをやるぞ。」エサをひとつかみ，タイの群れめがけて投げてやった。

１か月が過ぎ，安戸池はのどかな日々が続いていた。和三郎が未来に向けて新たな考えをめぐらせようとしていたところだった。和三郎はふとタイの異変に気づいた。「あっ」一瞬体が凍りついた。「やられた」和三郎はガツーンとハンマーで頭をなぐられたような衝撃を受けた。

よく見ると，目玉が異様に突き出たもの，尾びれが痛々しく傷ついたもの見れば見るほどタイの痛みの激しいのにびっくりして言葉も出ない。傷ついたタイは人影を見てももう逃げる力もなく，よたよたと群の流れに押されているだけだ。アジ・サバの失敗が昨日のことのように思い出される。養殖漁業は和三郎が考えているほど甘くなかったのだ。

長年和三郎が考えてきた「海の美しさをこわさずに，自分の理想の世界を安戸池につくる」夢は，がらがらと音を立ててくずれていく。くやしさにくちびるをかみ，タイに向かって大声を出すが，ふきあげる怒りをしずめることはできず，やぐらの上でじだんだを踏んで悔しがった。和三郎は完全に敗北感に打ちのめされていた。

松村哲夫『ハマチになった和三郎』讃文社より

注１（区画策）…養殖漁業で，魚を放す区画のこと。
注２（沖枡網）…定置網の一種で，水深100メートルぐらいまでの潮流の速くない一定の場所に取り付け，やってくる魚をとらえる網のこと。
注３（櫓）……見はり台